

# 「水が織りなす安曇野今昔物語」講座

～ 穂高編 第4回 ～

「全国に名を馳せた先人たち」



日時：平成23年11月18日(金) 午後7時から

場所：穂高会館 講義室②

## 講師プロフィール

中島 博昭 氏 (なかじま ひろあき)

1934年 安曇野市穂高生まれ。

現在、地域史研究家、「安曇野文芸」編集長、安曇野塾運営委員。

長年、松本深志高校など県内の高校社会科教師を務めるかたわら、郷土の優れた人物や文化財の掘りおこしと顕彰、地域づくりに尽力。

前長野県短期大学講師。

著書 『鋤鋤の民権—松沢求策の生涯』

『がいどぶっく 安曇野の里 穂高ものがたり』

『安曇野に八面大王は駆ける』

『探訪・安曇野—その旅と歴史ロマン』

『唄え、安曇節』

『常念山麓』

『犀川川筋ものがたり』

編著 『あゝ祖国よ恋人よ—きけわたつみのこえ上原良司』

ほか。

## 旧・穂高町の個性と魅力

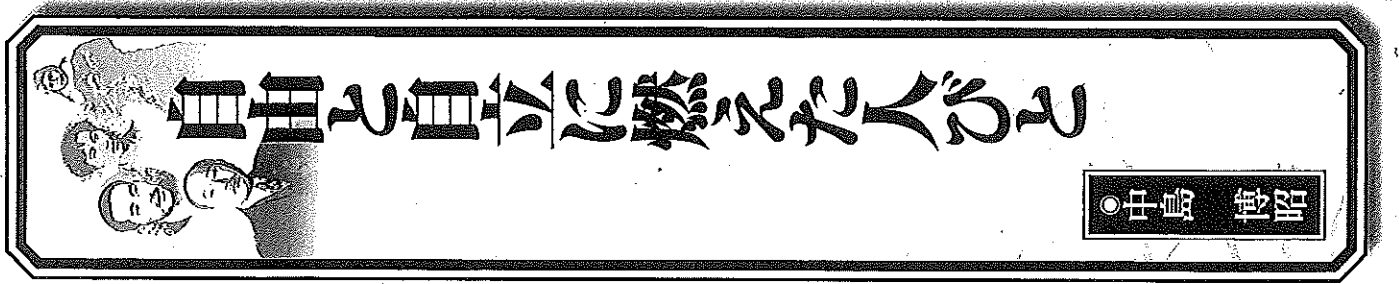
### 第4回 全国に名を馳せた先人たち

資料

『安曇野大紀行』（一草舎出版）より抜粋

※資料貸出場所

- ・中央図書館（みらい）
- ・豊科図書館
- ・堀金図書館
- ・明科図書館



安曇野の西方にそびえる日本アルプスは、安曇野の山脈であると同時に日本の屋嶺でもある。

この地に輩出した松沢求策、相馬愛蔵、井口亨源治、萩原礫山、清沢潤、上原良司などの群像は、安曇野の土壌から育った人脈であると同時に日本近代史の瑰い雄々を築き、日本の自由と平和の金字塔を打ち建てた。

この地出身の白井意見は彼らをとりあげて、晩年『安曇野』や『獅子座』を書き残した。

「彼らには自前の自由と平和の系譜があった。十五年戦争で三百万同胞の血の犠牲を出さずに戦後の自由を日本にたどりつける系譜が」

というのが白井がこれらの本に託していたかった点であった。

彼らの生きた時代と人生はそれぞれ違うが、近代の主流が官権主義や欧米模倣、形式主義をもって権威づけたのに対し、彼

らはいずれも権力の圧迫に抗し、独創を重んじ、人間性の尊厳を強烈に打ち出しているのが特色である。分野は違うが、俗悪を排し、静らかに厳しく、そして一途に信念を貫く人間像が共通項として浮かび上がってくる。

時代順に四人を選び、その人間像に迫ってみよう。

#### 松沢求策 夜明けの自由のランナー

松沢求策の三年間の生涯は、わが国の激動の歴史と共に展開された。安政二年（一八五五）、保高郷等々力町村（現安曇野市郷茂）に友弥・きしの長男として生まれた時は、長い鎖国が破られ開国、アジア諸国同様、欧米諸国の植民地となる危機の時代が始まろうとしていた。人生を貫く条約改正の国民的悲願を抱く道が、すでに行く手に待ち構えていた。少年時代学んだ私塾・足園塾で、師・高島章貞の国家改革に燃える志士

の生き方に傾いた。明治維新の大変革は、商家の取りにすべく、近くの養蚕・木和屋に丁種奉公させた父母の期待を裏切っていた。近郷からひとつ通いのとめを嫁に迎え、若松屋の跡取りに落ち着かせようとしたが、それとて時代の激浪の底まりには勝てなかった。

明治八年（一八七五）二〇歳の時若ヶ堰の堰守に選ばれた。もともと扇状地で稲作に向かない安曇野を現在のような米どころに変えたのは、江戸時代に開削された瀬遊用水路・拾ヶ堰のおかげだった。堰守は田んぼに用水を供給する要職だった。稲の生育に合わせて、日々の天候を勘案しつつ、公平・迅速に堰の水門を調節して、水を農民たちに送らねばならない。一日たりとも怠を怠くことのできない激務であった。この仕事から求策は農民の取入や郷土のありさまがこんだたかたを知った。昼間、堰守の仕事を終え夜になると、地元の農家を一軒一軒訪れて集金したり役所からの通知を告げて歩く。「御一新だ、



松沢求策

彼の言い出しの言葉である。明治維新は学校を一村にひとつ、役場もつくり、徴兵制を布いた。その資金は幕府の時代と同じように、すべてが庶民、つまり自分たちの肩におしかぶさつてきていた。農民の家計の取入を知り、支出までが見えてくると、妻や子

どもまで疋る農民の弱状が、国家のあり方からもたらされていることがわかってくるのだった。

彼は研成学校と呼ばれる村の学校の学校世話役をも務めていた。「教育県令」と呼ばれ教育の振興に力を入れた永山徳輝県令は、庶民の楽しみであるお祭りや芝居・宴会を規制して学校建設資金に振り向けるよう圧力をかけた。県内くまなく学校を巡視し、研成学校へも訪れている。学校世話役や村役人は強制的に集められ、その説諭を聞かなければならなかった。

「学校は天下富強の基礎である。学校建設のため一〇年間に一戸一五円出してもらおうが、教育を受けて、やがて役人にでもなつてみなさい。その一五円をたつた一か月分の給料で手に入れられる。みなさん、歌舞伎が好きとうつつを抜かしておるが、そのおかげで田畑に行かず、ぜいたくさんまいにさける愚け者が増えている」

そして二時間の説諭の最後は、「これだけ論じて、まだ学校がよくいかないならば責任はわしにあるのでなく、その方にあると思いなさい」と威圧をかけた。

ところがそれから一年経って、これを聞いた学校世話役たちはまとまって県に次のような要請書を提出したのである。

「研成学校の経営は、わずか教師・校母の三人だけですべてをとりしめし、住民との協議をしないで、無駄な金を使っている。監査請求をしても受け入れようとしな。まったくの庄政で許せない」

運動の中心となつたのは、近くの田井尊代だつた。

そして彼らは住民と共に三年かけて、学校の改革に成功したのである。すでに人民主権と自由の萌芽は、地方のこの地にも芽生えていた。彼らは「御一新」に代わる、自分たちの幸せになる新たな國家の改革が必要と悟りはじめていた。彼らのなかの田井尊代や相屋安兵衛などは、これから安曇野の自由の系譜



武居用拙



法蔵寺  
塾のあった豊科・法蔵寺

を支える土台となつてゆく。

そして求策は、ちやうど隣村・豊科に政治を教える塾が開かれたと聞き、堰守を辞めて入塾した。

彼は養子のいる家庭を離れて、國家改革をめざす民権家の塾を辿ろうとしていた。

この塾は維新の廢仏毀釈で使われなくなった法蔵寺の本堂を教場にして、木曾から招かれた武居用拙の教える塾だつた。招いたのは豊科の右力者・藤森寿平とい

う人物だつた。

「官吏は人民のために存在し、人民の幸福を第一となすべきものである。官吏にこの気持がなければ、ただ給料をもらはる輩でしかない」

あこひげが胸までさがつた用拙は人民主権の原理をしつかりと教え、県下各地から彼を求めて学びにきた青年たちの改革の炎をいよいよ燃え立たせるのであつた。

当時欧米の自由・民主思想が好んで民権家たちに学ばれたのに対し、この塾ではそれだけでなく、安曇野の郷土の巨魁一揆の指導者・多田加助を研究した。江戸時代、直訴がご法度で罪とされたのを見直し、人民の請願権の先駆と見て、これからの国会開設運動の理論とした。ここにこの塾の特徴があつた。

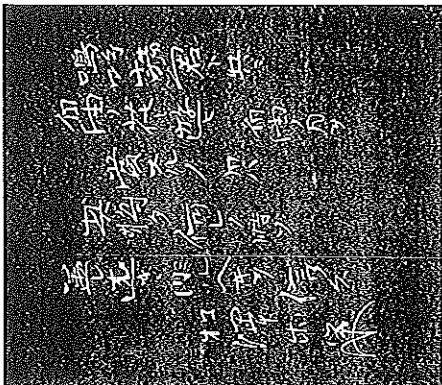
ほかの県では民権運動を進める政治結社があつたが、長野県では、松本郊外に士族から来た民権家と求策が同じような結社をつくろうとしたものの、入る者が少なかつたため失敗、結局、武居塾がその役割を果たすことになつた。武居塾が猶興義塾とも呼ばれるのは、めざした政治結社がその名前だつたからであつた。

明治一三・一四年はわが國が國會を開き、憲法を制定するか、それを要求する全国的に結集した國民と阻もうとする政府との激しい闘争が繰り上げられた年であつた。國民のめざしたのは國民主権の立憲國家であつた。

この大運動の先頭に立つて、運動をリードしていたのが長野県民二万余名の總代であつた松沢求策と上条總司であつた。二

を務め、のちの板垣退助が総理となる自由党の基礎をつくった。また、その自由党の機関紙的役割を果たすべく東洋自由新聞を発刊、名門・西園寺公望を社長に、民権論の第一人者・中江兆民を編集長にすえて運動を進展させた。

わが国の近代民主主義制度である国会、憲法、政党などは、このときの連年の国会開設運動の盛り上がりへの成果として生まれたものであった。その動きの中軸には若い松沢求策の存在があった。彼が求めてやまなかった請願権は、みごとに憲法規則の制定につながった。大日本帝国憲法で国民の望んだ国民主権がしりぞけられ天皇主権に委わり、自由の諸権利が認められなかったなかで、この権利だけは明記され、国民の請願の道は開かれたのである。



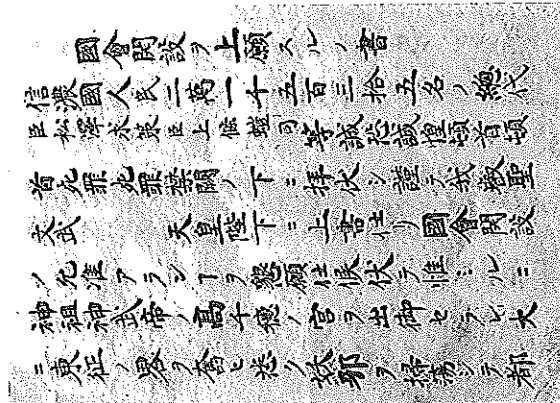
祝賀にある駒形千之助に刻まれた自筆文

東京へ着いてからの一か月間はかりは、こんな怒口論争で終わった。「なぜ請願書を受け取らないのか」「国民に請願権は認められていないのか」。執拗にこの点を糾して政府にくいさがあった。彼らは、だれも踏み出していない請願の道は切り開くため、もうひとつの戦術を駆使した。それは新聞・雑誌の情報メディアを利用することであった。現在のマスコミがらみの政治活動の先駆ともいえる。大新聞・雑誌は連日、求策らと政府とのやりとりを報道した。それを見て国民は政府の態度に憤慨し、求策らの運動に呼応して全国が燃えていった。地方

五歳と二二歳の差である。全国各地から上京し地方の期待を担って国会開設を要請する代表たちに混じって、求策たちの運動がひととき注目され、運動をリードするようになったのは、請願運動の形を真似た点にあった。

政府は国民の請願権を認めていなかった。せいぜい認めていたのは慰白権だったため、多くの政治結社は「国会開設慰白書」という形で要請書を提出した。しかし「慰白」では政府はただ「聞き置く」だけで、国民に責任をもって回答する義務がなかった。求策ら長野県の場合は請願権こそ、本来人民が持っている生活していくうえで不可欠な権利だから、政府は、この権利を認めて、要請に対し何らかの対応をせざるをえないものと考えた。それは武居退で学んだ理論であった。彼らが持参した請願書は武居用紙から指導を受けたものであった。

「大政大臣に含ませろ」「それはできない」「請願書を受け取れ」「慰白書でないから受け取れない」



松沢求策らが持参した国会開設請願書

から中央へ国会開設を望む人びとが怒涛のごとく押し寄せてきた。そして組織的・計画的に立憲国家の仕組みづくりには立ち上がった。

わが国始まって以来、国民が政治のためにこれほど連帯したことはなかった。政府は屈伏して、明治四年一月、一年後に国会を開くという勅諭を出さざるを得なかった。

松沢求策の業績は、国会開設運動をリードしたという点だけに留まらなかった。

全国の国会開設運動の政治結社がまとまった国会期成同盟で「運動を強力に進めるために、全国的な政党をつくれ」と初めて政党の結成を提案。その結果生まれた自由党筆頭会の役員

しかし、このときの国民と政府との闘争で、事あらばと待ち構えていた政府は求策への弾圧をむきだしに強行した。東洋自由新聞が飛ぶように売れていくのに恐れをなした政府は、社長の西園寺を辞めさせればよいと考えた。彼を呼び出し、天皇の許めよという内勅を渡して辞任に追い込んだ。求策はこの事情を機文にしたため全国の民権家へ送った。民権の危機を国民の連帯と団結の力で乗り切ろうとしたのである。機文の最後に彼はこう結んだ。

「あゝ、諸君と共に自由の花に遊び、自由の月を愛する日は、それまたいずれの時ぞ。けだし憂きにあらざるべきを望む」

「自由」という自分たちの歴史を創る、短いが激しい求策の生涯の中で、もっとも深く心の奥からしぼり出された声である。当時の民権家はぎりの欧米思想の言葉でなく、日本人の心へ最も浸透できる言葉を用いたあたりに、彼の自立の姿勢を窺み取ることができないだろうか。

天皇の内勅に逆らって彼の要請に応える動きは、当時まだ国民の間に生まれてこなかった。それをみて求策への弾圧の機会を狙っていた政府は、彼を逮捕し石川島の牢獄につないだ。

その後は、八丈島の島政改革や長野県の県会議員になって県立中学校建設提案など自覚ましい活動があるものの、政府にマークされる生活は変わらず、最期は無実の罪で入獄した先での獄死であった。明治二〇年六月二十五日、享年三三歳。折しも三年後に念願の国会が開設され、生きているならば、彼も議員として暗れの舞台に登場できそうという時であった。

思ふ事つくしもはず さほはれて  
かへらぬ旅に 心のこして

群世には、念願かなわぬ無念の気持ちが溢れ、「夜明けの目  
由のランナー」としての人間像を浮き彫りにするものである。

## 相馬愛蔵 自立と独創のデユエット

新宿中村屋の創設者・相馬愛蔵が活躍した時期は、松沢求聚  
が亡くなってから一〇年ほどしか経っていないところであ  
る。松沢の死後、わが国は国会が開かれ、憲法による政治の行  
なわれる國家となった。アジアでは初めて進展した国情を背景



壮年期の相馬愛蔵  
(『安曇野文芸』2001.10から)

との間に確立しなければならなかった。神の前では平等を説く  
キリスト教が、その実現に役立った。愛蔵と黒光は共にクリス  
チャンだった。

結婚して二年目の三年の秋、研成養塾が生まれた。その舞  
台は相馬家の洋風の広間だった。それは安兵衛が若夫婦のた  
めわざわざ横浜まで行って調べてきて、作ってやったものだ  
った。養塾誕生の発端は、穂高神社周辺の料理屋に善妓を置いて  
町を發展させようとした業者や町に、生活浄化運動をしている  
愛蔵の禁酒会や近くにあった高等小学校の保護者たちが反対運  
動を起こしたことであった。

結島敗北し、禁酒会のメンバーで小学校の教師だった井口喜  
源治がこの学校を追われた。赴任先の豊科小学校でも受け入れ  
を拒否された結果を受けて、この広間で禁酒会幹部がどう対  
応するか審議した。個々に悩んだあげく、愛蔵の言った発言が  
すべてを決めた。

「尊神、穂高といわず、天下に君をいれる学校はおそらくある  
まい。君をいれることのできる学校——それはただひとつ、君  
自身の学校だ。われわれはどこまでも援助する」

これは、国家主義教育に固められていく公教育と自由主義教  
育の対決の問題であった。熱烈なクリスチャン教師・井口を国  
家主義教育の学校が受け入れないならというのである。

愛蔵の言葉は、自立に生きようとする彼らの気概を端的に示  
していた。秋の夜が更けて虫が鳴き、近くを流れる万木川の水  
音が聞こえてきた。井口が顔をひきつらせて、腕を相馬にさし

に、欧米諸国と結んだ不平等条約が改正されて、明治三年に  
は、独立國家として世界と交流できるまでになっていた。

彼の活躍した地域は、松沢と同じ目井喜代や相馬安兵衛らの  
研成学校事件の起きた土壌であった。安兵衛は彼の長兄で、東  
穂高村(現安曇野市穂高)の東部、白金集落の村長格の存在  
だった。

白井は南隣の矢原集落の養塾家だった。松沢が活躍した國會  
開設運動の明治一三、一四年のとき、愛蔵は研成学校の二階に  
寄宿して、運動に奔走する住民たちを見ていた。

三男だけどここにでも行け、何にでもなれる自由な運命と  
思っていた愛蔵に、大きな障害が立ち上がったのが、明治二  
〇年代、札幌農学校を卒業したころであった。安兵衛に子ども  
がなかったため、順養子となって白金の生家を継がねばならな  
かったのである。故郷に帰り、骨を埋める覚悟で養種製造の仕  
事に精進した。キリスト教をひろめ、青年たちをまとめ東穂高  
禁酒会のリーダーとなり生活改良運動に尽力した。

そんな前向きな姿にほれほれとして仙台の島尻兵太夫が連れ  
合いにと紹介して結婚することになったのが、中村屋のヒロイ  
ンとなる良、のちの黒光(号)である。

三〇年春、安曇野郷土に嫁いできた良との新婚生活は、夫婦  
だけの愛に酔えるものではなかった。三年の条約改正による  
外人との内地雑居で日本人は欧米人に劣らぬ日常生活の基盤を  
築かねばならなかった。「自由」の権利が実質的に國民に保障  
されねばならなかった。「平等」が男女の間に、金持ちと貧民

のべ「ありがとう」とがっちり手を握った。

それから若い彼らは安兵衛や白井喜代などの援助を仰ぎ、自  
分たちの矢原・白金集落の子どもたちを高等小学校から退学さ  
せて、「研成養塾」を開塾させ、井口に指導を託した。「研成」  
すなわち「研究して成し遂げる」——かねてからこの地に育  
まれてきていた精神であった。たつたひとりの教師の小さな小  
さな学校だが、国家主義教育の支配の及ばぬ自主独立の天地で、  
背後には「硬い骨を有する人びと」(内村鑑三の言葉)ががっ  
ちりガードしていた。「アーメンはゴーマン」などという世間  
の差別・中傷に耐えながら、ここから、このあと記す自由主義  
外交評論家・清沢別などを輩出するの、研成精神の然らしむ  
るところであった。

しかし、こうした理想の実現にもかかわらず、愛蔵にとつて  
骨を埋める覚悟の故郷は、妻、黒光との夫婦生活という点で大  
きな歪みを与えるものとなっていた。「地主の娘」という黒  
光の地位は、家事は下女がやってくれ、育児も初めて子どもを  
持ったジジ、ババの安兵衛夫婦が奪ってしまつては、「何もや  
ることのない退屈の日々」をもたらすだけだった。「煙を吐き  
出せぬ噴火山」だった。ストレスで疲弊になる。夫婦ともに男  
女平等を説く「女学雑誌」を愛読し、生活・社会への参加を人  
一倍激しく望む妻であった。愛蔵が妻の気持ちを理解して、東  
京に「中村屋」という菓子店を開いたのは、結婚してまだ四年  
しか経っていない時であった。

明治後半から昭和まで愛蔵・黒光夫妻が築いた「中村屋」が

文化の大正デモクラシーに与えた影響は限りなく大きい。

研成義塾と同じく、たった夫婦だけのちっぽけな菓子屋がわが国のみならず国際的にも大きな足跡を残した秘訣は、「自立と独創のデモエット」という他ではみられぬ夫婦の人生の姿勢にあった。穂高時代は夫主義徒の關係が、この場合遮断していた。

開店のころの広告を見ても、「中村屋」の当主は「相馬良」となっているが、経営は穂高時代から定評のあった愛蔵が担っていた。

東京という競争相手が無敵に争っているなかで、デパートの大資本力にも負けず、昭和一四年（一九三九）には東京での小売業でナンバーワンの売れ行きを示した殊願よりは、「新商人道」とも呼ばれた。消費者の立場に立ち、良い商品を開発し、掛け値なしの安い価格で販売し、消費者の絶対的信用を獲得した。愛蔵が求められて書く色紙の文字は、「誠実」と「研究」の四文字だった。研成精神を端的に示していた。

美、黒光の才能がいかに発揮されたのは、「中村屋サロン」の場において

だ。愛蔵が求められて書く色紙の文字は、「誠実」と「研究」の四文字だった。研成精神を端的に示していた。

美、黒光の才能がいかに発揮されたのは、「中村屋サロン」の場において

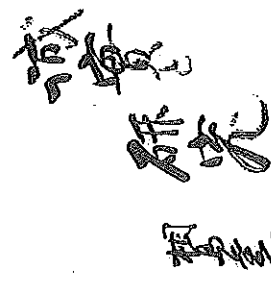
んと言いながら、日常的、家庭的で、それだけに礫山からすると、内心は「恋しい人」への恋情とその夫であり尊敬する仲間への気遣い、そして作品制作への情熱とが交錯し、緊張感が走り、苦悶する。彫刻作品「女」などは、そんなSTRUGGLEの成果だった。わが国の近代彫刻の出現が話題となり、それが中村屋の名前を衆知させる結果となり、菓子屋の売り上げを高めるのに拍車をかけた。中村屋サロンは、こうしてわが国の文化の発展に貢献しながら、同時に中村屋の繁盛につながっていった。そして大正デモクラシーを高揚させる機軸ともなった。

愛蔵の言う「己れの業をもつて国家、社会に貢献する」という信念が、こうした形で実現したのである。

サロンは礫山から始まった美術、文学、国際連帯、そして演劇へと発展し、同じような効果を残した。この順序は黒光自身の興味の発露のままに展開され、妻の思いをしつかりと夫、愛蔵が支えた。



中村屋サロンのメンバー（山本安藏・戸塚風雁・中村良子などの顔も見える）（『安藤野文芸』から）



愛蔵の好んで書いた色紙（『安藤野文芸』から）



東京 中村屋 新 宿

中村屋の商標「双馬→相馬」と生き方が国際化されている（『安藤野文芸』から）

であった。明治女学校出の才女の周りには、その魅力に惹かれて多くの優れた才能の持ち主が集まってきた。人はそれをヨーロッパのサロンになぞらえて「中村屋サロン」と呼んだが、わが国で稀有の、このサロンはいろんな点で注目された。ここでは絶対的に妻が中心

だったが、その動きを夫が十分に保障できる力量と寛容さが必要だった。きらきら煌めく黒光の影にはたえず黒子のように夫愛蔵の姿があった。

近代彫刻の先駆者、荻原礫山の作品と黒光との関係は、いまやあまりにも有名になったが、これは中村屋サロンが最初の場面であった。穂高時代、禁酒会の仲間の礫山が、代表・愛蔵の妻の線入り道具の油絵に触発され美術家を志す。サロンは、フランス帰りの礫山が新宿中村屋に入りし、彫刻制作の極みを黒光に相談していくうち惹かれて、そのSTRUGGLEが作品に昇華してゆくという場面となる。

ヨーロッパのサロンが、広敷岡での女主人中心の集會であるのに対し、ここでは、菓子製造を手伝ったり、相馬家族と一緒に食事をするなかで、恋愛し、芸術作品の制作が舞られていく。礫山は黒光を子どもたちが呼ぶように「母さん」と呼ぶ。サロ

このなかで「国際的」サロンは、夫妻の国際正義感の爆発したものであった。大正の初め以来の中村屋の活動は、松沢求策のころの国民主権を越えて、市民主権段階へと入り、國家の枠をはずして、国際的広がりの中で、人間の価値を最大限に活かすことに尽力した。

インドの独立運動への連帯と買人ロシア人のエスペラント語普及による国際活動への協力、となると、その視野の広がりも驚くほど大きい。

ヒハリ・ボース、彼はインド独立運動の志士でイギリスのお尋ね者となって日本に逃げてきた。イギリスは当時、世界最強の帝國でわが国は日英同盟を結んでいた關係から、日本政府は彼の逮捕に躍起となった。それに対し、アジア連帯の立場からボース救済こそ国際正義とみる日本人たちがいた。相馬夫妻も同じ考えだった。菓子屋で人の出入りが多いからと彼をかくまったことが、夫妻のインド独立運動へ足を踏み入れるきっかけになった。

当局の追っ手を避けてボースを守るため、長女の後子を嫁がせ、世間の人びとを驚かした。その結果、日本でのインド独立同盟を夫婦が中核となって巡るのを、愛蔵夫妻は背後から援助し、中村屋はインド独立運動の拠点となった。

中村屋の役員も務めたボースの教えたカーリーライスは昭和初期、中村屋の名物商品となり、現在にまで続いている。

太平洋戦争は、インド独立戦争の側面も持っていた。ボースは東南アジアのインド人たちをインド独立軍に仕立てて、日本

軍と一緒にイギリス軍と戦わせ、一時はシンガポールに自由インド臨時政府を樹立した。本国の国民会議派と母國に西進するインド国民軍と日本軍とでイギリスを狭み撃ちにして、インド革命を成功させようとした計画はボースの死後失敗に終わった。

相馬家にとり太平洋戦争はアジア進帯を貫くものだった。沖繩法戦では、ボース・俊子の長男、正秀を失った。孫の死に黒光は「國家のための名誉の戦死とおしつけてよいものであるか。われわれ一族だけの悲しみではない。日本人の八、九分までが等しくこの犠牲を、尊敬もなく強いられたのである」と嘆いた。

エロシエンコはやはり相馬夫妻が自宅に住ませ、援助を惜しまなかった人物である。ロシア語のできる黒光、国際進帯に積極的な夫妻だからこそ可能だった。盲人ながら彼は多彩の能力の持ち主だった。歌声でロシア民謡を歌い、バラライカを弾き、黒光のオルガン伴奏でバイオリンを奏することもあった。

中村屋の名物品目にボルシチが加わり、従業員制服がルパンカに変わったのは、エロシエンコとの交流の賜物だった。

童話を創作して、それを朗読し、中村屋サロンが文学・演劇活動の場となったのは、このロシア人が加わってからだった。もともと黒光は目の見えないエロシエンコに文学作品を読んであげていた。エロシエンコの創った童話は二階で朗読され、楽しまれた。その主人公は、多くが魚や鳥、金魚、虎などだった。彼の描く世界は自然や宇宙であった。人間はその中で動植物より進んだ存在ではあるが、主人公の動植物を自分たちの暮らし

のために食べたり、利用する攻撃者として描いている。そこには大正期の時代や社会に対する批判がこめられていた。人間の知恵は産業や科学を発達させ、自由主義も大きく広がってきていた。しかし、庶民の生活は一見便利で楽しいものの、よく見ると人間どうしの間や自然と人間の間には甚だしい不均衡と矛盾を生み出していた。繁榮の蔭に苦しんでいるものが仰山といた。

エロシエンコは童話の形をとりながら、その矛盾を弱者の立場に立つて告発した。朗読を聞いたサロン仲間が共鳴し、これらを本にまとめ世に出そうという声が出てきた。

だが出版は順調な流れでは進められなかった。エロシエンコの影響力の大きさに危機感をもった政府が、突然彼を国外追放したのである。真夜中、中村屋に多くの警官が押し寄せ、寝ているエロシエンコや愛蔵・黒光夫妻をたたき起こし、警察署に盲人を連行した。住居人の許可なく侵入したのは職権乱用と、相馬夫妻は淀橋警察署を告訴した。署長が辞職し相馬夫妻が勝訴となるが、中村屋のみことさはこれだけではなかった。

ロシアに強制送還される直前、警察署でエロシエンコに面談した黒光は、童話集の構想しかなかった本の序文を警官の立ち合っている目前で、エロシエンコに口述させて、彼女はそれを筆話した。夫妻の強靱な精神性を示すエピソードである。

大正一〇年（一九二一）夏「夜明け前の歌」が出版された。この本は、のち中国に渡ったエロシエンコと交流を持つ魯兎の心を打ち、中国で「愛蔵先頭童話集」と題して出版された。

中村屋サロンの生み出したエロシエンコ作品が日本だけでなく、中国でも読まれていたという事実は、貴重な日中友好の架け橋として忘れてはならない事実であろう。同時に大正期と似て地球環境の悪化が問題となっている今こそ、エロシエンコと相馬愛蔵夫妻の活動は、多くの人びとを励ます希望の光となるのではなかろうか。

清沢 冽 戦争と革命ノー 永遠の自由主義

今まで見てきた松沢求策、相馬愛蔵とこれから見る清沢冽、上原良司は、自由主義の系譜では同じ流れにありながら大きく異なっている。それは前者が明治から大正、昭和初期までの目



自由主義に生きた清沢冽 (清沢冽胸像建立記念誌) から

由主義の峰を築いたのに対し、後者は昭和初期から太平洋戦争敗戦までの自由主義である。松沢、相馬の場合、「攻めの自由主義」「新生、発展期の自由主義」であるのに対し、清沢、上原は「守りの自由主義」「保守から永遠の自由主義」と名づけていように思う。

大正から昭和初期にかけて、資本主義経済は需要・供給の不均衡から恐慌を繰り返し、国民生活は窮乏の淵に落ち込んだ。資本主義國は、イギリス、アメリカのような先進國とロシア、ドイツ、イタリア、日本のような後進國とで、それぞれ異なる対応をして、その変革のあり方を模索した。ロシアはプロレタリア革命を行い、世界最初の共産主義國家となり、ドイツ、イタリア、日本は、ロシアのような共産主義國家か、それとも軍國主義化して戦争をして植民地を多く獲得するか、どの道を選ぶかが課題となった。「二〇世紀は戦争と革命の世紀」とも言われるが、この変革には、ともに強力な國家権力を築くことが不可欠と考えられた。

そこで、戦争とプロレタリア革命を進める右翼と左翼のどちらの勢力も、今までのような国会、憲法のような立憲制度を、もはや「時代後れの自由主義」として選んだ。長に問、求策や愛蔵たちが築いてきた言論、集会、思想などの自由の権利を「悪い自由主義」と無視しようとした。

昭和八年から一二年までマスコミを舞台に展開された「自由主義順着論争」は、それまで先人たちが営々と築き上げてきた自由主義を國民が捨てるか、活かすかの最後の選択の舞台で



あった。

このとき、自由主義擁護の旗手として奮闘したのが、研成義塾の卒業生である外交評論家・清沢潤であった。

論争は昭和八年六月、「新潮」に彼が載せた「自由主義の立場」の文章に対する批判から始まった。

清沢の文章はこんな風だ。

満州問題の話をしていたところ、聞いていた友人が「君は自由主義にとらえられているからいけない」と言ったというのだ。「わたしはこの時ほどびっくりしたことはなかった」「自由主義にとらえられる」とはどういうことが、反論した。

「とらえられるという文字ほど、およそ自由主義に不似合いな言葉はない」と彼は言う。

この憎悪は、すでに自由主義が圧迫されてきている姿を伝えている。二年前に満州事変に突入し、十五年戦争の口火を切った軍部が、翌年の七年に五・一五事件で大蔵蔵相を暗殺し、政治の息の根が止められていた。国民の心情を反映する流行歌は「酒は涙かため息か」「影を蒸いて」となり、八年のこの年には「東京喜劇」の捨てばちなものに変わってしまった。

清沢はこのあと、自由主義と対比するなら、左右両翼を貫く、独断的、戦術的、挑戦的な心構えと比較すべきと言う。

当時、自由主義は「保守」で、国家権力を強める左右両翼は「革新」とみられていた。清沢はこの動向に激怒と批判する。「自由主義から観れば、左右とも全然同じもの。「戦時心理」という点で。敵に対する憎悪から生まれた非常時心理であ

る。戦場において敵と戦う右翼の軍人と、街頭に敵と戦う戦士にとつては、自由主義で大事に考える「寛容、反省、自由、討議」という言葉は「敗北、後退」の別名だ。

清沢がもつとも言いたかった尊厳は、自由主義の心構えだけには、どんなことがあるとも、いままでわが国の先人たちが築き上げてきた共有財産で、捨ててはならないという点であった。

資本主義と不即不離と見られてきた自由主義は、「資本主義」の政策、主義と切り離して「心構え」と考えるべき。政策では時代に際して「社会主義」をとつても、「心構え」の自由主義だけは、どこでも、いつでも不変の守るべき原理というのだ。

この清沢の文章に対して、両翼から反論が出る。論争の舞台は、「中央公論」「改造」などの有力総合雑誌や書評誌、日刊紙だった。日本各地での講演会でも論じられた。批判・反批判の応酬が国民の目の前で繰り広げられた。

「文芸春秋」の「自由主義検討座談会(昭和八年九月号)」、「中央公論」の「題意自由主義の検討(同一年五月号)」、東洋経済新報社の「自由主義とは何か(二人の知識人の座談会)」のようなまとまった場だけでなく、個々の論者の文章や講演もあつて、国民に遊路選択の場が提供された。

しかし、時はすでに軍国主義への坂道を下りはじめていた。

昭和一〇年春、東京帝大(現東大)で開いた「自由主義批判講演会」は、三派の代表が学生の前で講演をした。自由主義代表の清沢は、左派の巨坂潤や右派の藤沢親雄の自由主義批判に学生たちが拍手、喝采をおくり、筋を通して主張する自分の話

に冷笑を浴びせるのに、愕然とした。彼らは何も聞かない前から自分の持っている考えが絶対正しいと信じ切つて耳を傾けようとはしないのだ。教育とジャーナリズムの影響力の恐ろしさをまざまざと知った。

もはや新聞・雑誌の紙面には(□□)の赤字がみられ、自由に表現すらできなくなつていた。

そんな厳しい世論の動向のなかで、孤軍奮闘にも近い活動に明け暮れる清沢は、国民に向かって自由主義の真意を訴える。「まず、わたしたちがめざすものは、自分が幸福になることです。その幸福な社会を実現する方法で大事なこととは、「できるだけ犠牲の少ない方法」を定めることです。

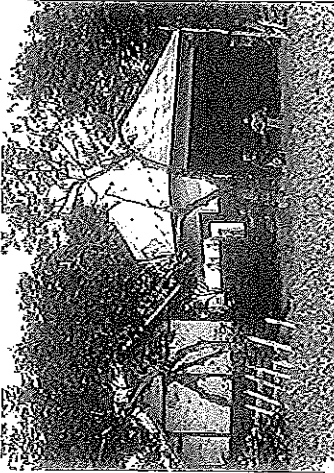
私たちは先輩の努力のおかげで言論の自由という良いものを現在持っています。現在以上に社会を良くしようというのですから現在持っている良いものを失つてはなりません。戦争や革命で幸福な社会を作るといいますが、それで現在より良くなるという確率性があるわけではありません。現在持っている良いものは、よほど確率に導かれるという保障がないかぎり、絵に描いた食えない餅と交換すべきではありません。

そのために大事なことは何でしょう。国民性の紙に染いながら新しい時代を展開させてゆくことです。プロレタリア革命を説くマルキストは、人種や国境を越えて各国の同じ階級が団結して幸福になると考えていますが、私はそうは信じません。歴史と伝統、人種上の相違は無視できるものではありません。といって右翼の軍国主義者のように日本だけが他国より優れて

いる、というような自國至上主義はとりません。

人類に共通する法則も大事にして人類の進歩と幸福を追求します。人類の進歩は言論の自由によって保障された教育と研究があつてこそ実現するのです。」

論争は、純粋に、冷静にそれぞれの考えの内容と比較・検討するのではなく、自由主義を攻撃する側は総じて政治的でセンセーショナルであつた。清沢らの懸命な主張も防衛の域を出ず、国家体制は二二六事件を境に、日中戦争へと急務のこころ突入していき、国民選択の重要な論争は不毛に終わった。



清沢が学び、大きな感化を受けた研成義塾。今はない。

清沢潤は明治三年、現在の谷登野市、北穂高に生まれた。こんな不屈の魂を清沢にはくまされたのは、少年時代に学んだ研成義塾であつた。彼自身「私は(研成義塾で)世の中には、金や地位や名誉よりもっと大切なものがあることを知りました。それは信念です。愛する

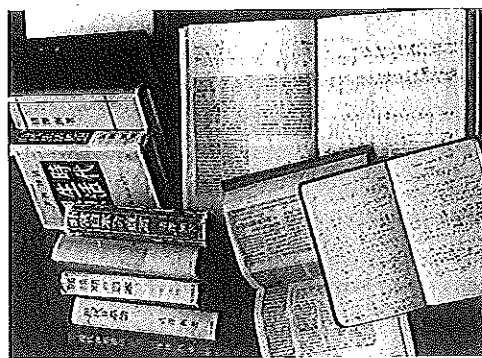
国家のために正なりとするところを主張するのです。自己一身の不利を覚悟しながら」と述べている。

義塾では万水川の川べりの葦草に座って、よく授業が行われた。師・井口登源治を手伝って、塾の機関誌「天鏡」を編集して全国に送付した。「天鏡」とは「勤勉に労働に励み、真面目に生活する中で感得できる天然の声」であった。立身出世や金銭の幸福でなく、心の眼で物の真の価値を見いだす幸福追求の姿勢が、すでにこの塾で芽生えていた。

この年は、塾が奨励した海外移民活動で北米に渡って大きく育った。日本だけにこだわらない世界的視野を身に着けた。新聞記者の道に入り、それは帰国しての外交記者としての活動につながった。朝日新聞社に企画部次長で入社したのが昭和二年だが「甘船と大杉の対話」のエッセイが右翼の攻撃を招き、朝日を退社、外交評論家に転身した。世界中を視察、観念でなく事実を正確に把握、日本の指針となる多くの本を出版した。いずれも自由主義から国家極力主義へ向かう祖国の行方を私ずものであった。

太平洋戦争に突入し、言論弾圧は熾烈を極めた。昭和七年には治安維持法で最大といわれる懲禁事件が起こり、清沢も執筆禁止者のリストに載り、急激に仕事の量が減った。四六時中、特高刑事が身辺をうらつき、言論活動はまったく停止に追い込まれた感があった。

そんなころ、夕方になると丸ビル内のレストラン「銀星」にひとり、ふたりと入っていく影があった。影は地下室に消えた。



著書と『暗黒日記』原本  
(岩波文庫『暗黒日記』から)

そこに集まったのは、中央公論社長の嶋中雄作、政治学者・蝦山政道、戦後に首相となる芦田均や石橋建山など自由主義者たちであった。彼らは清沢の呼びかけで昭和四年に結成された「中央公論」の執筆者たちで、「二六会」のメンバーであった。彼らは特高の目の届かない地下室で「軍部は敵艦」「日本は負ける」と語り合った。そこではアメリカとの和平工作や戦後の準備まで語られたふしが見られる。

昭和一九年、彼は戦後を見越して日本外交史研究所をつくり、外交家の経歴談の収集、外交史辞典の編纂などに取っかかった。もうひとつ、一七年二月九日から書き始めた日記も、戦後に現代史を書くための記録・資料と考えたものだった。

それを書く書斎は二階にあり、親しい知人ですらそこには入れなかった。階段の上と下にそれぞれドアがあつて用心を固

めていた。書斎へ一歩足を踏み入れると、そこは当時のわが国からみると、異常な風景だった。欧米の書籍でうまり、敵国のルーズベルト、チャーチル、蒋介石、スターリンの写真が飾られてあった。

ここで秘かに書き綴った事柄は、清沢にとり人間性を失った狂気のおが国の姿だった。「戦争日記」と本人は呼んだが、夫人の故・總子さんは「愛憎の記録」といったほうが清沢の思いに叶うと言っている。

この日記は昭和二〇年五月五日で終わっている。

突然の死が訪れたのは、それから一六日たった五月二日、肺炎だった。期待した敗戦を見ずしての終焉だった。享年五十五歳。

戦後、彼の書き残した日記は『暗黒日記』の名で、彼の業績を象徴するものとなった。

### 上原良司 死を賭けて国民にメッセージ

清沢が敗戦を経験し、戦後の準備に余念なくして急逝したころ、同じような思いで特攻隊員として沖縄の海に散っていたのが上原良司だった。

明日の攻撃を目前にした昭和二〇年五月一日夜、彼が書き残した「所感」は次のように国民に懇願している。

「一器械である吾人は何も云う権利もありませんが、ただ、願わくば愛する日本を尊大ならしめられん事を、国民の方々にお

願いするのみです」

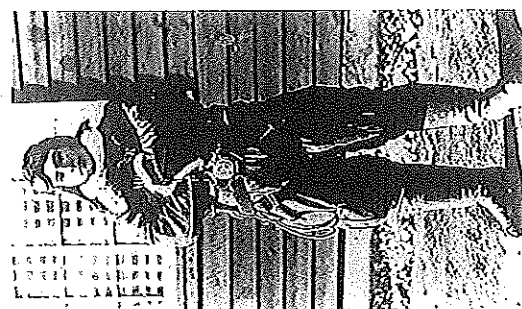
彼は特攻死を「探縦線を探る器械、人格もなく感情もなくもちろん理性もなく、ただ敵の航空母艦に向かって吸いつく磁石の中の一分子に過ぎぬ」と見た。

それは明治以来、国家に命を捨てるのが名誉と教えられてきた國策と歴史への反逆だった。

「一器械である吾人は何も云う権利もありませんが」——悲壮感溢れ、一見控えめに見えるこの言葉は、次の国民への懇願の言葉とつながると、人間でなくされた国家への憤りとなって胸に鋭く突きささってくる。

彼は「所感」で、軍国主義日本の誤りを告発し、その敗北を予告し、国民に自由主義日本の実現を訴えた。死を賭けて国民に向けてメッセージを発した。

この「所感」は、現代の言葉である「きけわたつみのこえ」



上原良司  
(信濃毎日新聞「新報あゝ祖国よ恋  
人よ」から)



の冒頭に掲げられている。  
戦後六〇年たったいま、これを読んだ多くの人びとの間に自分と祖国の在り方がこれでいいのか、と衝撃が走りつつある。戦争体験を持つ者、持たぬ者に戦争と現在を考ふる至言として全国的に、世代を越えて関心と注目を集めている。

一体、当時としては稀有ともいへき思想はどう生まれ、上原良司とはどんな人物なのだろうか。

彼は大正一一年に生まれ、清沢川の出身地、北穂高に近い有明に医者の三男として育つた。下にはふたりの妹がいて兄妹仲が良く、温かい家族愛に包まれて成長した。

祖父とは一種に暮らすことがなく、すでに明治末に亡くなっていたが、その名の良三郎の「良」の文字を取っただけでなく、性格的にも教師の祖父から受け継いだものが多かった。

祖父は、研成学校の後身、穂高学校の校長を務め、そのころ萩原磯山が生徒でいた。相馬愛蔵や井口寛源治と生活改良運動に尽力し、しばしば研成義塾に出入りしていた。「三川」の俳号をもち、正岡子規の高弟でもあった。

良司の謙虚、控えめな性格は祖父ゆずりといえようか。

昭和一〇年、松本中学校(現松本深志高校)に入学。この学校は長野県でもっとも歴史が古く、しかも自治の伝統で有名であった。授業以外の学校生活はすべてが生徒の自治活動によって進められてきた。良司が入学した一〇年は、自由主義頭落論争の時期ではあったが、まだ自治の伝統は健在だった。

清沢川が自由主義擁護で奮闘して敗れていった影響は、この



松本中学校の卒業記念写真  
〔新渡戸、祖国よ逐人よ! から〕

学校にも及んだ。校長が生徒の下駄ばきに対し靴で登校するように命令を出した。相談会という生徒の自治組織が抵抗し、校長退任にまで運動は発展したが、結局、敗北した。その後の校友会誌には「自由より統制へ、すべてはこの方向をとり、本校の自治も従来のままでは時代おくれであり、相談会は校長先生の監獄機関とし…」という時流に沿った生徒の主張が掲載されるようになった。

このころ、上原は上級生になっていて、この変化を実感していたはずである。のち「所感」に書く「自由主義」は、当時、清沢ほど正しいものとの認識はなかったかもしれないが、「時代おくれ」と捨てられた状況は心に影を残していたと思われる。

昭和一六年、慶応義塾大学に入学。その年の二月八日、太平洋戦争勃発、興奮した手記を日記に残している。この大学も自由の伝統があったが、青春を謳歌する余裕はなかった。戦争

の進展とともに、死を意識せざるを得なくなっていく。  
「前途を見ろ。まず戦場、そして…帰れたら、いや帰ることなんか考えてはならぬ。戦死こそ汝の最も希望するものではないか」(一八年日記)

よく行く知人の家に出会う下彫れの美しい女性に心を寄せるようになる。石川治子。友だちと好きな女性を話し合うときでも、彼女だけは話せば汚すことになると、口にできなかつたほどの想いようであった。

それだけでない。愛の告白を彼女にどんなにしたいと思っただけに、それができなかつた。自分が死ぬ身であつてみれば、告白はかえって彼女を苦しませることになる。彼女を本当に愛するがゆえに、告白はできなかつた。

彼は愛蔵書「クロオチエ」の本の中にひそかに治子への想いを普通ではわからぬ形で残した。ページをめくると、あちこちに〇で活字が囲まれている。その文字を埋めていくと、次のような文章になる。

きょうこちゃん さようなら 僕はきみが好きだつた しかし そのとき すでにきみはこんやくの人であつた わたしはくるしんだ そして きみのこうやくをかんがえたとき あいこのことはさやくことを だんねんした しかし わたしはいつも きみをあいしている

「クロオチエ」は知人の家のある萬田寺の古本屋で購入したものであった。羽仁五郎の紹介するイタリアの反ファシズムの自由主義者の語録は、良司の心を強烈にゆさぶった。読んでいて共

鳴する個所に赤エンピツで傍線を引くだけでなく、欄外の余白に「自由＝人間性」とか「歴史は自由の発展なり」と書いて深く心に刻みつけた。この本は、「所感」にいたる彼の思索の手本となった。

清沢川の自由主義論が上原の思想に影響を与えていたかどうかはわからないが、「心構えの自由主義」と政策・主義とを区別して自由主義の普遍性を説く点では、上原は確かに清沢の思想の流れに沿っている。上原がその死を悼んだ河合栄治郎にしても、「クロオチエ」の羽仁五郎にしても清沢と同じ思想の流れにあつた数少ない自由主義者であつてみれば、上原の「所感」の思想は、クロオチエだけでなく自由主義頭落論争以後の清沢らの自由主義思想も染められて花を開いたとみてもよからう。

上原は六冊の日記と三通の遺書を残した。それらは死に向かつてどう考えて生き、どう死んでゆくかの、彼の記録である。

生徒動員がきまつた昭和一八年九月、「クロオチエ」の表の見返しに書いた第一の遺書は、「日本の自由のために戦う」という個所はあるものの、家族あての一般の兵士のものとはほとんど変わりはなかつた。

第二の遺書は、特攻隊訓練を受けている昭和一九年に書かれたもので、現実の軍隊体験と彼の信じる理論との相克のなかで、その内容は自由主義の重要性が認識されていく。

とりわけ七頁に見える「修養反省録」は、軍隊の指導する方向と上原のめざす方向とが激しく斬り結んだ場となった。

戦死しても天国に行くから、靖国神社にはいかないよ」

今にして考えると、「所感」に書く彼の確信は、この時にはしっかりと固まっていた。国家より個人を大事に考える彼は、国家主義の象徴である靖国神社に背を向けた。

軍隊に帰るとき、家から少し離れた乳野橋のたもとで良司は「さようなら」を三度も言ってお別れを告げた。

これまで聞いたことのない大きな声聞いて母親のよ志江は、(良司は死ぬ気であるんだな。最後の別れに来たんだ)と思った。その辺りは良司が幼い頃、兄妹や近所の子どもたちと遊んだ懐かしい場所であった。目の前に端正な若明山が聳えている。「さようなら」は家族だけでなく、故郷や自分の二三年間の過去への別れでもあったのではないだろうか。

「所感」は敗戦後の国民に向けたメッセージだった。

「自由の勝利は明白なことだと思えます。人間の本性たる自由を滅ぼすことは絶対に出来なく、例えそれが抑えられている」とく見えても、底においては常に闘いつつ最後には必ず勝つと云う事は、彼のクローチも言っていることと真理であると思えます。権力主義の国家は一時的に隆盛であろうとも、必ずや最後において敗れることは明白な事実です。我々はその真理を、今時世界大戦の中軸国家において見ることが出来ると思えます。ファシズムのイタリアは如何、ナチズムのドイツまた既に敗れ、今や権力主義国家は土瓦石の壊れた建築物のごとく次から次へと滅亡しつつあります。真理の普遍さは今、現実によって証明

「五月一日 軍人精神とは何ぞや。誠なり。総ての批判を止めよ。而して実行せよ。」

五月十三日 切腹準備、即ちなぐることに非ず。一考を要す。

六月一日 見習士官たるの自覚を持って、現在は自覚に委せられぬとて、事実上初年兵の如き生活を送りつつある。

六月五日 俺は本日は死したり」

ある隊員が航空眼鏡を紛失したが、そのため隊員全員が責任を問われ、炎天下を直立不動の姿勢で十数時間立たされ、倒れる者が続出した。この時の事である。以来、隊長と隊員との気持ち離反していった。こんな事件が続くうち上原の軍隊とわが国のあり方への疑問が大きくなっていく。

「六月二十四日 我々は現実には左右されてはならぬ。常に将来の事を考えよ。…現勢はわが国に不利である。」

六月二十七日 改直しく人格者たれ。教育隊に人格者少なき



恋人・石川淳子  
(『新編あゝ祖国よ恋人よ』から)

を遺囑とする」

「汝」とはこの日記を見る上官を指していた。

これを見た上官の赤エンビツの文字があとにつづく。

「真横へ上官ヲ批判スル気カ。其ノ前ニ真横ノ為スベキコトヲナセ」

だが上原のペンはひるまない。

「七月八日 教育隊に人格者なきを再び痛感す。ことは飯盆に閉してなり。この前の眼鏡事件と同じだ。答返はせぬ。我々をまるで罪人扱いにしている。みんなの憤慨もつともなり」

上原が注目したのは、上官が非人間的な圧迫を加えることが、かえって隊員の反感を強め、自由への欲求を揺り動かしている点にあった。

この頃、結婚した心の恋人・石川淳子が亡くなったことを伝え聞いた。

羨しき君が逝きたる天国に

われ天賦けり行かまはしとぞ思ふ

良司

上原が最後に帰郷したのは敗戦の四か月前、軍事機密上、最後の別れを言うことは禁じられていた。

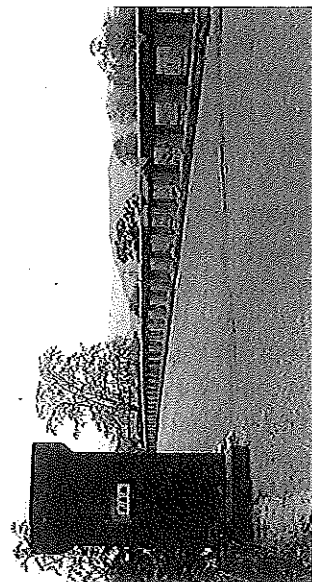
だが彼は家族や友人との何気ない会話のなかで、今生の別れを赤唆するいくつかの語録を残していた。

家族と一夜酌み交わしたときのひとことを妹の登志江がはらはらして聞いていた。

「日本は敗れる。俺が戦争で死ぬのは、愛する人たちのため

されつつ、過去において歴史が示したごとく、未来永久に自由の偉大さを証明してゆくと思われまふ。自己の信念の正しかった事、この事はあるいは祖国にとつて恐るべき事であるかも知れませんが、吾人にとつては嬉しい限りです。…」

第一・第二の遺書にはなかった自由主義の正しさに対する確信がここには堂々と主張されていた。数年前「時代おくれの思



家族との最後の別れの場となった、布明・乳野橋

想」と逃げられた自由主義こそ絶対捨ててはならない、未來永劫・普遍的な真理と観れるに至った喜びが、信念となってほとばしり出していた。渾沢別が守り永続化しようとした自由主義が、さらに体系化され、このあとの前途の国民への懸願で、その擁護を迫っていた。

「飛行機に乗れば空飛ぶのですけれど、いったん下りればやはり人間ですから、そこには感情もあり、熱情も動きます。天国に待ちある人、天国において彼女と会えると思えば、死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません」

軍国主義によって人間ではなくされた人間が、ひたすら人間としての願いや愛情をつつましく、握るために逃ぐる、その迫力の強さが軍国主義への激しい糾弾となっている。そして人間性・自由の愛しさ、ゆかしさを盛り上げ、既亡人の胸に熱く伝わってくる。

「明日は出陣です。明日は自由主義者が一人この世から去っていきます。彼の後の姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。」

それから三か月後、わが国は敗戦を迎えた。そして、一年も経たぬ昭和二年四月二十日、あの「さようなら」を三度告げた乳房橋を、上原良司は小さな骨盤に納まって無言で帰郷するのだった。

そして乳房川はあの時と同じようにただ静かに流れていた。

メモ

A series of horizontal dotted lines for writing notes.